

小児看護学・母性看護学技術演習の取り組み — 学生の自己学習目標及び自己評価の分析を通して —

三浦 浩美*, 舟越 和代, 榮 玲子,
小川 佳代, 植村 裕子, 松村 恵子

香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科

Clinical Practice between Pediatrics and Maternal Nursing Sciences: Analysis of Aims of Self-Learning and Results of Self-Evaluation of Students

Hiromi Miura*, Kazuyo Funakoshi, Reiko Sakae,
Kayo Ogawa, Yuko Uemura and Keiko Matsumura

*Department of Nursing, Faculty of Health Sciences,
Kagawa Prefectural College of Health Sciences*

Abstract

Clinical practice of the combined pediatrics and maternal clinical nursing sciences was held, and the aims of self-learning and the results of self-evaluation of students were analyzed. Their aims of self-learning were classified into “deepening of understanding,” “acquisition of skills,” and “acquisition of knowledge and skills.” About 30% of the students were aware of the integration of knowledge and skills. The analysis of the results of their self-evaluation suggests that they acquired images of mothers and children, and shared learning in group. It appears that setting the cases of subjects, adopting pseudo-experience, and tackling problems in group were effective.

Key Words: 技術演習 (clinical practice), 自己学習目標 (self-learning), 自己評価 (self evaluation)

*連絡先: 〒761-0123 香川県高松市牟礼町原281-1 香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科 三浦 浩美

*Correspondence to: Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kagawa Prefectural College of Health Sciences, 281-1 Murecho-hara, Takamatsu, Kagawa 761-0123 Japan

1. はじめに

看護大学卒業者の実践能力の向上の必要性が叫ばれ、看護学教育のあり方を検討した報告書が出された¹⁾。これによると、看護実践能力の基礎を確実に習得するためには臨地実習は不可欠な過程であるが、近年医療の高度化に伴う環境刺激・変化の影響を受けやすい患者の増大や患者の権利意識の向上により、学生の技術習得の機会を確保することが難しくなっていることが指摘されている¹⁾。特に小児・母性看護学実習においては、少子化に伴う分娩件数や入院患児の減少、入院期間の短縮化など、臨地実習の条件を整えることが難しくなっている。このような状況の中、臨地実習の充実に向けた方策の一つとして、事前学習の充実が挙げられている¹⁾。

臨地実習は、対象の状況を認知し、状況に即したケアを組み立てていくための思考能力を必要とする。このような思考能力は主体的な学習活動によって培われる²⁾。

また技術演習は、臨地実習の事前学習として、講義で学んだ知識を技術として身につける機会であり、また受動的になりがちであった学習活動を主体的な学習活動に切り替える第一段階として重要な役割を持つ。

本短期大学の看護学教育課程では、小児臨床看護論と母性臨床看護論は独立した教科目であるが、技術演習を合同で行っている。それは少ない時間数で、教授内容が充実するという利点があり、また母と子の双方を包括的に看護の対象と捉えることができる機会としたいというねらいからである。

本稿では、小児看護学・母性看護学技術演習（以下技術演習という）にあたっての学生の自己学習目標及び演習の取り組みについての自己評価から、今後の指導のあり方について検討することを目的とする。

2. 技術演習の実際

1) カリキュラムの位置づけ

本短期大学の小児看護学と母性看護学のカリキュラムは、それぞれ概論1単位15時間（1年次後期開講）、保健論1単位15時間（2年次前期開講）、臨床看護論2単位70時間（2年次後期開講）、看護学実習2単位90時間（3年次

開講）となっている。

小児臨床看護論では、子の成長・発達、健康維持から生じる健康問題に対する看護の具体的方法、入院中の子、母、家族への援助について教授している。また、母性臨床看護論では、周産期の妊娠、分娩、産褥における生理的現象と病理的現象、母と子と家族の基礎的な看護について教授している。

技術演習は、小児臨床看護論と母性臨床看護論でそれぞれ62時間の講義を行った後、20時間を使って実施する。

2) ねらいと目的

技術演習のねらいは「母と子を包括的に捉え、看護の対象として考えることができる」ことである。

目的は以下のように学生に提示した。

- ①妊産褥婦と新生児の援助に必要な主な看護技術について理解し、実施できる。
- ②小児の特徴を踏まえて、小児看護に必要な技術が実施できる。

3) 演習方法

オリエンテーションは事前に講義の時間の一部を利用して行った。技術演習のねらいは口頭で説明し、目的や日程演習項目について明記した資料を配付し説明した（表1・2）。学生は資料に基づき事前学習をして演習に臨む準備をした。

初めの4時間は、技術項目のデモンストレーションを行い、その後16時間で学生が技術演習を実施した。1クラス50名を4グループ（1グループ12～13人）に分け、ローテーションで、看護技術を実施する方法を取り入れた。各グループにリーダー、サブリーダーをおき、リーダー・メンバーシップを考えながら技術演習に臨むこと、グループメンバー同士で根拠・方法を確認し、配慮や工夫をすべきことを話し合いながら行うよう指導した。

4) 技術項目

小児臨床看護論の技術項目は、「乳幼児の観察・身体計測とバイタルサインの測定」「輸液管理」「経管栄養・吸入」「保育器の取り扱い」であった。人形を用いて行うが、看護過程の展開で学習した紙上事例と同じ状況設定をして、子の状況をイメージし、配慮や工夫を考えながら実施できるようにした。実施後は自分の行った技術について振り返りの記録を行った。

表1 合同技術演習の目的と内容

1. 妊産褥婦と新生児の援助に必要な主な看護技術について理解し, 実施できる.
 - 1) 妊婦の健康診査(子宮底・腹囲の測定, レオポルド触診法, ドプラーによる胎児心音聴取, 骨盤計測)
 - 2) 乳幼児の観察と計測
 - 3) 分娩準備教育と産褥体操(妊婦体操, 呼吸法と弛緩法, 補助動作, 産褥体操)
 - 4) 乳房ケア, 着帯
2. 小児の特徴を踏まえて, 小児看護に必要な技術が実施できる.
 - 1) 手洗い, ガウンテクニック, 低出生体重児の看護(保育器の取り扱い)
 - 2) 新生児の健康診査と看護(沐浴, おむつ交換, 抱き方, 授乳方法など)
 - 3) 経管栄養, 吸入(小児)
 - 4) 輸液(小児の輸液管理)

表2 演習項目と担当教員

	演習項目	前半	後半	担当教員
1回目 (4時間)	新生児の健康診査 沐浴	1・2グループ	3・4グループ	A・B
	乳幼児の観察	3・4グループ	1・2グループ	C・D・E
2回目 (4時間)	妊婦の健康診査	1グループ	2グループ	B
	分娩準備教育と産褥体操	2グループ	3グループ	A
	経管栄養・吸入 乳幼児の計測	3グループ	4グループ	D・E
	手洗い ガウンテクニック 保育器の取り扱い	4グループ	1グループ	C
3回目 (4時間)	妊婦の健康診査	3グループ	4グループ	B
	分娩準備教育と産褥体操	4グループ	1グループ	A
	経管栄養・吸入 乳幼児の計測	1グループ	2グループ	D・E
	手洗い ガウンテクニック 保育器の取り扱い	2グループ	3グループ	C
4回目 (4時間)	新生児の健康診査 沐浴	1グループ	2グループ	A・F
	乳房ケア 着帯	2グループ	3グループ	B
	乳幼児の観察	3グループ	4グループ	D・E
	輸液	4グループ	1グループ	C
5回目 (4時間)	新生児の健康診査 沐浴	3グループ	4グループ	A・F
	乳房ケア 着帯	4グループ	1グループ	B
	乳幼児の観察	1グループ	2グループ	D・E
	輸液	2グループ	3グループ	C

母性臨床看護論の技術項目は、「妊婦の健康診査」、「分娩準備教育と産褥体操」、「新生児の健康診査・沐浴」、「乳房ケア・着帯」であった。擬似妊婦体験や、事前に作成した乳房モデルで乳房ケアを行うなど、妊婦の身体的心理的状态をイメージできるよう工夫した。

5) 教員の関わり

教員は、各技術項目毎に1～2人ずつ担当した。そして学生が行っている技術に関して根拠・方法・工夫について発問し、学生間での話し合いが活発になるように関わった。また、母と子双方への配慮・工夫が考えられるようにするための発問も行った。

6) 評価

演習後、各技術項目の習得状況について「できる」から「できない」の5段階の学生による自己評価と、「乳幼児の観察」「沐浴」に関しての技術試験を行ない、教員による客観的評価を行った。

3. 研究方法

学生の自己学習目標と技術演習の取り組みに対する自己評価の分析を以下の通りに行った。

1) 対象者

小児臨床看護論と母性臨床看護論を履修した、本短期大学看護学科2年生46名のうち、研究に同意した44名を対象とした。

2) 調査内容及び方法

(1) 自己学習目標

小児看護学・母性看護学技術演習のオリエンテーション終了後、技術演習にあたっての自己学習目標を自由記述で求めた。

(2) 演習の取り組みに対する自己評価 (表2)

演習全体を振り返り、自己の取り組みに対する自己評価を求めた。

評価項目は、学習行動に関する4項目、対象理解に関する3項目、理解度に関する1項目、グループダイナミクスに関する3項目、満足度に関する1項目、計12項目の質問内容を独自に作成した。回答は「全くそうだ」5点、「かなりそうだ」4点、「まあまあそうだ」3点、「ときにそうだ」2点、「それほどでもない」1点の5段階のリカート法とした。小児看護学・母性看護学技術演習終了後に調査用紙を配付した。

3) 分析方法

(1) 自己学習目標

学生の目標について、類似しているものをまとめて分類した。この過程を研究者間で意見が統一するまで繰り返し行った。

(2) 自己評価

各質問項目ごとに度数と割合を算出した。

4) 倫理的配慮

当該学生には、調査の目的を説明した。個人が特定されることはないこと、研究への協力は自由意志であり、成績には関係ないことを調査の度に文書と口頭で説明し、同意書の記入を求めた。

4. 結果

1) 技術演習に当たっての自己学習目標 (表3)

学生が技術演習に当たって挙げた自己学習目標は、《技術の習得》《知識に裏打ちされた技術の習得》《理解度の強化》の3つの視点に分類された。

(1) 《技術の習得》

《技術の習得》を目指した学生は21名であった。

「一つ一つの手技を正確にマスターし」等の「確実な手技の習得」を目指した学生が12名、「基礎をしっかりと学び、実習で行えるようにする」等「実習で使える技術の習得」を目指した学生が9名であった。

(2) 《知識に裏打ちされた技術の習得》

《知識に裏打ちされた技術の習得》を目指した学生は13名であった。

「なぜそうするかをきちんと理解して技術を身につけることができる」等の「根拠の理解と技術の習得」を目指した学生が7名、「新生児、乳児の特徴を理解した上で正確な看護技術を身につける」等の「対象の特徴を踏まえた技術の習得」を目指した学生が6名であった。

(3) 《理解度の強化》

《理解度の強化》を目指した学生は10名であった。

「できる限り、その時間のうちに覚えられるように事前学習をしておく」等の「事前学習の徹底」を目指した学生が4名、「今まで不確かな部分、うろ覚えの部分をもとめ、自

表3 技術演習に当たっての自己の学習目標

5 小児特有の看護のポイントや、技術をしっかりと学ぶこと	確実な手技の習得	技術の習得		
8 正確に技術を行えるようになる。				
9 実技などの手技を正確に把握すること。安全・安楽に行う。				
11 乳幼児の観察と計測で実際に観察ができ、正確な計測ができる。				
32 各技術項目についてのポイント(どこを特に気をつけたいのか)を押さえ自分で実施できるようにしたい。確実・適切な技術を行いたい。				
22 技術一つ一つの完成度を上げる				
36 すばやくケアを行えるようにケアをする時の流れ、ポイントをつかむ。				
17 一通りの看護技術を習得できる。				
46 基本的な物品と手技				
39 的確で安全な技術の修得。				
28 積極的に技術演習に参加して新生児への観察が自分でできるようになりたい。	実習で使える技術の習得	技術の習得		
40 手順や観察点を覚え、自分の技術に自信が持てるようにする。				
4 一つ一つの手技を正確にマスターし、実習に結び付けられる				
14 基礎をしっかりと身につけて、応用がきくような技術を身につける				
15 練習がきちんとできて、実習で応用できる				
38 とにかく基本的な技術を完璧にすることが目標であり、それによって応用にもいろいろ生かしていけるから。				
30 確実な技術を習得し、今後の臨床の場で、すぐ実践できるようにする。				
33 母性では、絶対を守るべき基本をしっかりと身につけ、助産院などで行われる母親の好む出産(体位など)にも対応できるようになりたい。				
47 基礎をしっかりと学び、実習で行えるようにする。				
31 技術を教わり、受け取るだけの学びではなく、自分の中で実際に臨床の場で生かすように消化すること。				
34 来年の実習で生かせるようにする。	根拠の理解と技術の習得	知識と技術の習得		
6 なぜそうするかをきちんと理解して技術を身につけることができる。				
21 演習を通して技術をしっかりと習得し、妊産褥婦や新生児に対しての技術を行うことの必要性を理解できる。				
23 行う技術すべてに関して、より理解を深めるとともに実施できるようにする。				
25 根拠と技術内容を理解できる。				
26 事前学習をもとに、根拠や意義を理解しながら手技が行える。				
27 技術を根拠とともにしっかりと身につけることができ、その技術に、自分が自信をもつことができる。				
37 すべての技術演習において、その意味を理解して習得すること				
18 新生児、乳児の特徴を理解した上で正確な看護技術を身につける。				
19 小児の特徴を踏まえた看護技術ができるようになりたい。				
24 小児・母性に関する知識を深め正確な技術を身につける	対象の特徴を踏まえた習得	知識と技術の習得		
35 小児の発達段階の特徴を知り、それに応じたケアを学ぶ。				
42 乳幼児のバイタルサイン測定の方法が理解できる。				
44 妊婦、褥婦、小児の特徴を踏まえたうえで、個々に必要な技術を実施できるようになる。				
1 できる限り、その時間のうちに覚えられるように、事前学習をしておく。				
3 事前学習をきちんとしておく				
7 一つ一つ丁寧に(技術演習や)事前学習を行う。				
10 予習をして、演習に臨み、分からないことがあれば先生方に質問をし、その場で解決すること。				
12 先生の言っていることを理解できる。				
13 注意点や要点を踏まえることができる				
16 きちんと整理して、いつでもすぐに目を通せるようにしたいです。いろいろな本を見て一番分かりやすいものをまとめる。	事前学習の徹底	理解度の強化		
45 今まで不確かな部分、うろ覚えの部分をもとめ、自分の知識として身につけておきたい。				
41 分からない点があれば、追求していくこと(復習や自己学習、質問・練習)				
29 小児と母性を関連付けて考えられるようにする。			対象の拡大	理解度の強化

分の知識として身につけておきたい」等の「理解度の強化」を目指した学生が5名、「小児と母性を関連付けて考えられるようにする」という「対象のとらえ方の拡大」を目指した学生が1名であった。

2) 技術演習後の自己評価 (表4)

各項目の度数と割合を表4に示す。学習行動に関しては、「演習の項目について事前学習ができた」の項目で8名(17.4%)の学生が「まったくそうだ」を選択していた。「事前学習と演

表4 演習後の自己評価

n=44

項目	5	4	3	2	1	
	全く そうだ	かなり そうだ	まあ まあ そうだ	とき に そうだ	それ ほど でも ない	
	人 (%)	人 (%)	人 (%)	人 (%)	人 (%)	
学習行動	1. 演習の項目について事前学習ができた	8 (17.4)	18 (39.1)	20 (43.5)	0 (0)	0 (0)
	2. 事前学習と演習後の学習を関連付けた記録の整理ができた	2 (4.3)	17 (37.0)	24 (52.2)	3 (6.5)	0 (0)
	9. 学習課題の達成に向けて継続的に取り組むことができた	2 (4.3)	23 (50.0)	19 (41.3)	2 (4.3)	0 (0)
	10. 演習内容については理解して実践できた	2 (4.3)	23 (50.0)	20 (43.5)	1 (2.2)	0 (0)
	11. 看護の対象の特徴について考えて記録できた	2 (4.3)	21 (45.7)	19 (41.3)	4 (8.7)	0 (0)
対象理解	3. 看護の対象となった母と子をイメージできた	2 (4.3)	25 (54.3)	16 (34.8)	2 (4.3)	1 (2.2)
	4. 母と子を理解するために演習での学びを関連付けた	1 (2.2)	22 (47.8)	22 (47.8)	0 (0)	1 (2.2)
	5. 新生児、乳幼児、母親と関係を築くアプローチができた	2 (4.3)	16 (34.8)	24 (52.2)	4 (8.7)	0 (0)
グループダイナミクス	6. 演習について自分の考えをグループ間で意見交換できた	5 (10.9)	18 (39.1)	19 (41.3)	3 (6.5)	1 (2.2)
	7. グループで演習したことで学びを共有できた	9 (19.6)	26 (56.5)	8 (17.4)	2 (4.3)	1 (2.2)
	8. グループダイナミクスとメンバー・リーダーシップを考えた	2 (4.4)	8 (17.8)	29 (64.4)	5 (11.1)	1 (2.2)
満足度	12. 母性・小児看護技術について行った演習は満足できた	9 (19.6)	15 (32.6)	18 (39.1)	4 (8.7)	0 (0)

習後の学習を関連付けた記録の整理ができた」の項目は24名(52.2%)の学生が「まあまあそうだ」を選択していた。

対象理解に関しては、「看護の対象となった母と子をイメージできた」の項目で25名(54.3%)の学生が「かなりそうだ」を選択していたが、「新生児、乳幼児、母親と関係を築くアプローチができた」の項目では24名(52.2%)の学生が「まあまあそうだ」を選択しており、評価がやや低下していた。

グループダイナミクスに関しては、「グループで演習したことで学びを共有できた」の項目で9名(19.6%)の学生が「全くそうだ」、26名(56.5%)の学生が「かなりそうだ」を選択し、評価が高かった。しかし「グループダイナミクスとメンバー・リーダーシップを考えた」の項目では29名(64.4%)の学生が「まあまあそうだ」を選択しており、やや低い評価となった。

5. 考 察

1) 自己学習目標

学内演習は、講義で学んだ知識をもとに、技術の根拠を理解し、正しい動作を習得すること、つまり「分かってできる」状態になる必要がある³⁾。しかし、学生の自己学習目標をみると、「分かってできる」状態を目指している学生は《知識に裏打ちされた技術の習得》を目指した13名、約3割であった。そして21名、約半数の学生は「正確に技術を行えるようになる」「基礎をしっかりと学び、実習で行えるようになる」という《技術の習得》に目標をもっていた。「正確に」「基礎をしっかりと」という表現に、根拠や必要性の理解が含まれているのか、単に手順や手技を覚えることを示しているかが不明である。また、「実習で応用できる」ことを目標に挙げた学生も、どのようにすれば実習で応用できるような技術を習得できているのかがこの目標からは読み取れない。このような学生に対しては、演習中に、既習の知識と現在行っている技術を十分に関連させ、確実に習得できるよう働きかけることに加え、複雑で個別の患者の健康問題やニーズに対応する、臨床の場面をイメージしやすい環境を整えることが重要と考える。

しかし、小児看護学・母性看護学の場合、対

象の状況の特殊性から、人形を用いて学習せざるを得ず、対象の反応や気持ちをイメージしにくい状況にある。そのイメージしにくい状況を少しでも打破するために、筆者らは擬似妊婦体験を取り入れたり、看護過程の演習で考えた対象のイメージとそれに対する援助の方針を技術演習で実践できるように状況設定を同じにした工夫が効果的であることを確認⁴⁻⁶⁾し、継続して行っている。

また、「できる限り、その時間のうちに覚えられるように、事前学習をしておく」「先生の言っていることを理解できる」など、事前学習の徹底や理解度の強化という、講義における学習目標と変わらない、認知領域に関する学習目標を設定した学生が9名いた。本来、技術演習は実習の前段階として、精神運動領域の課題達成が求められる。しかし、これらの学生は精神運動領域に関する視点が欠けている。事前学習やノートの整理など、認知領域の作業ばかりに集中しがちな学生には、グループ内での学生の様子を見ながら、行動化する機会を確保することが重要であると考えられる。

「小児と母性を関連付けて考えられるようにする」という、対象の捉え方の拡大を目標にした学生は1名のみであった。母と子を関連付けて捉えることは、技術演習の目的のひとつと我々は考えている。しかしそのことが学生には十分伝わっていないことが明らかとなった。これは、学生に配付している技術演習の要項に狙いを明記していないこと、小児看護学領域の目的と母性看護学領域の目的を分けて記載していることが原因であると考えられる。今後は、母と子の双方を包括的に看護の対象として捉えるというねらいを明記して学生に提示する必要があると考える。

2) 技術演習の取り組みに対する自己評価

事前学習は「まあまあそうだ」とした学生が43.5%と約半数いる中、「全くそうだ」としても努力した学生が17.4%みられた。そして、事前学習と演習後の学習を関連付けた記録の整理に関しては、「全くそうだ」から「ときにそうだ」まで評価が分散し、十分に振り返りができていない可能性が示唆された。

対象理解は、「小児と母性を関連付けて考えられるようにする」と自己学習目標を立てた学生は1人であったが、技術演習後は25名

(54.3%)の学生が「かなりそうだ」としていた。看護過程と同じ事例設定をしたり、妊婦体験を経験する演習方法が効果的であったと考える。しかし、「新生児、乳幼児、母親と関係を築くアプローチができた」に対してはやや評価が下がっており、人形を対象に技術演習を行う限界といえる。

グループダイナミクスは、グループで学んだことの共有は「かなりそうだ」とした学生が56.5%いた。グループメンバーの学習の仕方や理解度、対象の捉え方など、様々な面で刺激になったと考える³⁾。しかし、メンバー・リーダーシップについては、「まあまあできた」程度であり、今後実習を通して学んでいく必要がある。

6. 結 論

小児臨床看護論と母性臨床看護論合同で技術演習を行った。技術演習にあたっての学生の自己学習目標と技術演習の取り組みに対する自己評価を分析した。

学生の自己学習目標は「理解度の強化」「技術の習得」「知識と技術の習得」の3つに分類できた。知識と技術の統合を意識できていた学生は3割程度であった。

技術演習の取り組みに対する自己評価からは、母と子のイメージができ、グループで学習するこ

とで学びの共有ができたことが示唆された。対象の事例設定や擬似体験を取り入れ、グループで課題に取り組む形式が有効だったと考える。

文 献

- 1) 看護学教育の在り方に関する検討会報告(2002) 大学における看護実践能力の育成の充実に向けて。文部科学省高等教育局医学教育課, p23-25.
- 2) 石井八重子(2001) なぜ臨地実習なのか, “看護学臨地実習ガイダンス1-看護学理論のまとめと実践-”, 第一版, 医学芸術社, 東京, p28.
- 3) 平木民子(2002) 看護学教育における臨地実習前の学内演習の意義-日本赤十字広島看護大学のカリキュラム-. Quality Nursing 8: p818-822.
- 4) 柴玲子, 野口純子, 植村裕子, 竹内美由紀, 宮本政子, 松村恵子(2003) 母性看護における演習の学習効果-妊婦の看護における自由記述を分析して-. 母性衛生 44 (1): p93-97.
- 5) 舟越和代, 小川佳代, 三浦浩美(2003) 小児看護学における実践能力を高めるための学内演習の取り組み. 日本看護教育学会第13回学術集会講演集(長野), p140.
- 6) 小川佳代, 三浦浩美, 舟越和代(2004) 紙上事例を用いた小児の看護技術演習の工夫. 日本看護教育学会第14回学術集会講演集(山形), p156.

受付日 2005年10月31日